

幼児の笑いの表情について

川原田 恭子

序

笑いの表情、すなわち快のあらわれは、いろいろな場合に起りやすい。そして、単なる快から、喜び・得意などの情緒が分化する。すなわち快の情緒もまた、他とともに発達にともなう分化が見られるので、子どもの持っているいろいろの欲求の満足ということに、深いつながりを持っていると思われる。私は、笑いの表情をとらえて、

その原因などを調べたいと思う。

一、問題選たく(原因など)

今、ここにAとして登場させる子どもは、尚綱幼稚園に来て二年目の子どもである。Aは姉二人と姉の友だちとで遊んでおり、私ももちろんそこにいて、一しょに遊びつつの観察である。

(イ) 友だちの悪口を云いながらの笑い。

これは姉たちが離れて私と二人だけにな

った時であるが、そこから考えてこの笑いの原因は、遊びの中で楽しくて笑ったのでは決してない。ジャスティンは、笑いの条件として六つの原理を上げているが、もしもそれにあてはめるならば、第二の「自分よりすぐれている人が失敗する」に入るのでないだろうか。すなわち、悪口を云って、相手の自分より下であることに優越感を感じたことが原因だと思ふ。

(ロ) 一人ごとを云いながら浮べた微笑

明らかにこれは、Aが何かを想像して、それに話しかける想像の遊戯であり、Aが心から楽しく遊んでいるための笑いであろう。

(ハ) 悪口を云った相手に話しながらの笑い。(イで悪口を云った相手である)

ジャスティンによれば、第四の社交的微笑であろう。悪口を云った相手に笑いな

ら話しかけられて、Aも笑いながら答えたのである。しかし、この場合Aが、その友だちを憎く思いながら答えたのだとは思われない。何故なら、子どもたちには心から人を憎んだりすることは出来ないはずである。とすれば、イの場合も、単にそのとき思ったことを口に出したに過ぎないであろう。

(ニ) 汽車の窓、あるいは犬などに手をふりながらの笑い。

これも、口とどうよう遊びの中での楽しさから来るものと思われ、Aが楽しく遊んでいることになる。

二、発展状態及び発展原因

(イ) 悪口を云い終ったあと、すぐに笑いの表情は消え、無表情となった。悪口を云ったので悪いと思ったか、あるいは、Aが悪口を私に向って云ったのに対して私が無言だったので、笑いをやめたか、どちらかに考えられる。

(ロ) だいぶ長くその状態が続く、一人でしゃべっていたが、Aの母が来て話しかけた

ので、今までの笑いは消え、さらに大きな微笑が広がった。自分自身の遊びから、母が持つて来たオヤツに心をとられたのが原因であろう。

④ 笑いながら話していた表情は消え、少し怒りの表情になった。話している間に、相手が、Aの意見に反対したのである。しかし、怒りの表情もすぐに消え、続いて笑いながら私に話しかけたのである。たいして気にさわらなかつた故であろうが、この少しばかりの怒りの表情も、交社的にあらわれたと見ることが出来るであろう。

⑤ 外に遊びに行つての帰り道、通りかかるものに何でも話しかけ微笑は消えない。手をつないで歩くのが楽しいらしいが、その微笑が恐怖に変わる。二匹の犬がすさまじい勢いでけんかをしていたので見つけたのである。たぶん、おそろしさがさきになり、微笑が消え去つたものと思われる。

三、見 解

笑いはどの情緒かをきめることがむずかしいと一般に云われている。私自身も問題

を選んで見て、むずかしいことに気づいたのである。一番簡単に見えて、一番むずかしいのではないだろうか。笑いの状態はつきりつかめないばかりか、変りやすいので、問題としては失敗であつたかも知れないと思う。

笑いは、乳児における生理的な刺戟が一番低く、感覺的運動的刺戟が笑いをおこす刺戟として次に加わり、さらに社会的な刺戟が条件となつてくる。Aの場合も、この三つに限定してあてはめて見るならば、①、②は社会的条件による笑いであり、③、④、⑤は感覺的運動的条件による笑いとなる。おとなにおいては、その大部分が社会的笑いであるように、子どももその成長に従つて社会的笑いが大きな位置をしめるようになるのであろう。幼稚園児に、私たちが話しかけた場合、笑うのも、幼稚園で、人との交渉が早くからなされている為であらう。ジャスティンは、一般的な事からもつと進んで、笑いを起す条件として六つの原理を上げているが、私はこれだけでは不十分だ

と思わずにはいられない。何故なら、五六歳の子どもはもつといろいろの場合に笑いをおこすであらうから。もちろん原理であるから、すべてがこれにあてはまるといふことはないが、Aの場合をジャスティンにあてはめるならば、前記の如く、①は第二に②は第六、③は第四、④はふたたび六、⑤ということになるであらう。

子どもの喜びと笑いは、子どもの欲求や満足につながつていふと思われ。ことに年齢の少ない子どもはそうであらう。よく、子どもの笑顔を見たいばかりに物を買つて与えたり、いろいろ刺戟を与えたりするが、いけないことだと思ふ。子どもは落着きなく、刺戟を与えなければ何もしないと、いふことにもなりかねないであらう。笑いの大きな問題は、欲求の満足のさせ方にあるのではないだろうか。また、年齢が大きくなると、いろいろ社交的なことで笑うが、その導きかたも考えねばならない大きな問題であらう。

(尚綱短大保育科学生)